

「写真甲子園2018」報告

愛媛県立今治北高等学校大三島分校

7月30日（月）から8月5日（日）まで北海道東川町をメイン会場に行われた写真甲子園2018（全国高等学校写真選手権大会）本戦に、四国ブロックの代表として参加してきました。

写真甲子園は3人で1組となり、3回設けられた各ステージでテーマに沿う8枚組の組写真を提出します。基本的に顧問は選手のカメラに触れることができず、撮影に参加することも、撮影の指示を行うこともできません。写真のセレクトについても顧問がアドバイスができるのは、2時間の中で20分のみ設けられたテクニカルタイムという時間だけです。選手たちには自分たちの力で写真を撮り、自分たちの力で写真をセレクトすることが求められます。生徒たちの力量が白日の下にさらされる大変厳しい大会なのです。



子どもたちを撮影している風景



コテージの前で記念撮影

北海道に入り、まず感じたことは「とにかく暑い！」ということでした。連日30度を大きく超える猛暑の中、1週間に及ぶ過酷な大会がスタートしました。

宿泊場所は東川町のキトウシ家族村、1つのコテージに2校の生徒たちが同宿します。本校は愛知県立小牧南高校さんと一緒のコテージでした。1週間の共同生活を通して、小牧南高校の先生や生徒さんとも大変仲良くなりました。

7月31日（火）にはオリエンテーション、開会式、歓迎会等の諸行事が行われました。その後楽しみにしていた、ホームステイに向かいます。私たちは東川町で民宿を営んでいる正垣さん一家におじゃましました。正垣さんは数年前まで東京で都会暮らしをされていましたが、一家で北海道に移住。4人のお子さんがある、明るく楽しい家族です。とっても大きな北海道名産のどんすけすいかをいただいたり、花火をしたり、一家の皆さんの写真を撮らせてもらったりと、本当に楽しいホームステイを体験させていただきました。



ホームステイ先でスイカをごちそうに

8月1日（水）、いよいよ本戦大会のスタートです。

ファースト審査会のテーマは「色」。午前中は上富良野町で撮影を行いました。選手たちはバスでロケハンを終えたのち、自分たちが決めた撮影場所でバスを降車し撮影を行います。初めての写真甲子園での緊張もあり、またトラブルがあって自分たちが当初考えていた場所で撮影が開始できなかったこともあり、最初の撮影地では生徒たちは全く思うような写真が撮れず苦戦していました。昼からは美瑛町に向かい撮影を行いました。切羽詰まった生徒たちはバスの中での話し合いの結果、「なついろ」というテーマに絞り、青空の写った人物写真を揃えようと決め撮影に臨みました。幸いなことに美瑛町では観光客等も多く、とりあえず8枚組が組めるだけの数の写真を撮影することができました。初めてのセレクト



ファースト審査会作品より

会議を終えて、いよいよファースト審査会。審査員の先生方からは「自分たちの感じた北海道の雄大さや楽しさが表現された良い写真だ」と評価していただいた一方、「露出」「構図」「アングル」等、セカンド審査会に向けた様々なアドバイスもいただきました。



東川町での撮影の様子（北海道新聞社撮影）

ラストを写真に収めようと奮闘していました。苦労しながらなんとかセレクトを終え、始まった審査会。ほとんどの初出場校が通ると言われる写真甲子園の洗礼を本校も受けることになりました。昨日とは打って変わって審査員からは、「テーマの解釈が浅い」「テーマの光が全く感じられない」「縦横の線がうるさい」など強烈な駄目出しのオンパレードで、生徒も顧問も滅多打ちにされたセカンド審査会でした。

審査会終了後は、明日のファイナル審査会に向けて東神楽町へ撮影に向かいます。そこには夕日に照らされた一面の美しいひまわり畑が広がっていました。やさしいおばあちゃんとお孫さんに声を掛け、生徒たちは思い思いにたくさんの写真を撮影しました。結局ファイナル審査会ではこの時撮影した写真は使わなかったのですが、北海道の美しい風景に触れ、生徒も顧問も元気を充電できた気がします。



東神楽町のひまわり畑をバックに



ファイナル審査会の様子

8月3日（金）本戦大会もいよいよ最終日。5時前に起床した生徒たちは、5時半から徒歩で東川町内の撮影に向かいました。ファイナル審査会のテーマは「自由」。昨日のセカンド審査会を受けてリベンジを誓った生徒たちは、深夜まで続いた話し合いの結果、「モノクロ」「広角」「縦位置」「人物」という4つの遵守事項を決め、「出会い」というテーマで「光」「露出」の2点を意識しながら写真撮影を行うことにしました。撮影終了までの時間も限られていることから、全員が一か所で固まって撮影するのではなく、それぞれが町内各所に散らばって撮影を行いました。初日、2日目と審査員の先生方からご指摘をいただいたことに注意しながら生徒たちは一生懸命写真を撮りました。ファイナル審査会では、この2日間で驚くほど成長したことが感じられる素晴らしい写真を提出し、審査員の先生方からもたくさんのお褒めの言葉をいただきました。その後に行われた表彰式及び閉会式。セカンド審査会での評価が響き、残念ながら目標としていた上位入賞は果たせませんでした。生徒たちの劇的な成長に、監督席で見ていた私も思わず目頭が熱くなりました。



審査員の先生方と記念撮影



8月4日（土）。夕方に行われる生徒交流会までの時間は、本大会唯一の自由時間でした。午前中は、同宿の小牧南高校の皆さんと一緒に旭山動物園に撮影に行きました。プレッシャーから解放された生徒たちは、思い思いの写真を楽しみながら撮影していたようです。午後からは、ホームステイ先の子どもたちと東川町で開催されていた夏祭りに参加しました。また、生徒交流会では隠し芸大会も催され、他校の生徒さんたちとも仲良くなることができました。

小牧南高校の生徒さんと記念撮影

8月5日（日）。お世話になった東川町のスタッフの方々、ボランティアの方々、ホームステイ先の方々など、本当にたくさんの人に見送られながら、北海道東川の地を後にしました。終わってみれば長いようで本当に短かった、今まで経験したことがないほどとてつもなく濃い一週間だったように思います。



ホストファミリーとお別れ

「挑戦した人にだけ見える世界がある」これは昨年公開された映画「写真甲子園0.5秒の夏」の映画の中で秋野暢子さん演じる顧問の先生が、写真甲子園に挑戦する部員たちに投げかけた言葉です。今年度の閉会式の中でも東川町長さんからこの言葉を引用した示唆に富むお話がありましたが、本校の生徒たちの成長を見てみると、きっとこの「挑戦した人だけが見える世界」を生徒たちも見る事ができたのだと思います。全国から集う強豪校の生徒たちと同じ条件の下で競い合うことが、自分の力量の客観視につながり、周りの人に追いつくための試行錯誤につながり、結果として生徒たちの劇的な変化につながる。私自身も北海道に来たことで、「生徒の大きな成長」というフィルターを通して「挑戦した人にだけ見える世界」を見せてもらった気がします。

本戦出場に当たり、保護者の皆様、先生方、地域の方々等、多くの方々からたくさんの応援の言葉やご厚志を賜りました。本当にありがとうございます。また、今回の写真甲子園でお世話になった東川町の方々、スタッフの皆様、審査員の先生方、他校の生徒さんや先生方、ホストファミリーの正垣さん、機材等を提供して下さった各企業の皆様、取材をして下さった北海道新聞、共同通信の方々、そして北海道の地で出会った全ての方々に心からの感謝を申し上げます。

ホストファミリーの正垣さん
ファイナル審査会作品より



参加者全員で記念撮影（写真甲子園実行委員会撮影）

* それぞれの審査会に提出した写真は「写真甲子園2018」の公式ホームページからご覧になれます。